

## 新春特別企画 “年男”だからお客様

## 井口 遼太 Iguchi Ryota

全日本ナショナルチーム・エリートメンバー

「ジュニアクラブの子たちとは距離を取らず、友達感覚で話せる存在でありたい」

全日本ナショナルチーム・エリートメンバーの井口遼太選手(笹塚ボウル所属)は1998年7月24日、寅年生まれの“年男”。プロボウラーの両親を持ち、父が指導するジュニアクラブでボウリングを学んだ俊才だが、コロナ禍でナショナルチームの活動が停滞している現在は、自らが中心となってジュニアクラブの指導にあたり、親子でジュニアボウラーの育成と環境づくりに取り組んでいる——。(取材協力:笹塚ボウル)



## 2年足らずで200アベ突破

父・直之、母・久美子はともにプロボウラー。当然、幼少期からボウリングの英才教育を受けてきたのだろうと思いきや、「中学1年まではサッカーをやっている、ボウリングは年1、2回、遊びで投げるか投げないかのレベル」で、両親に強制されたことはまったくなかったという。

本格的に始めたのは中2の秋。夏休みに投げたときに面白さを感じ、父が勤務する笹塚ボウルに創設されたジュニアクラブに入会したのがきっかけだったが、当初は「クラブで仲よくなった同い年の子たちと一緒に投げるのが楽しかっただけで、ボウリング自体に熱中していたわけではなかった」そうだ。

「ボウリングをやりたい人集まれ!」と人材を吸い上げたカタチで、ボウリングを始めたばかりの子もいたので、まずはピンを倒す楽しさを教える(体感させる)ところから入りました(父・直之プロ)

同じ中2の秋には宮様チャリティーの城南地区予選にエントリー。それがはじめての競技会体験だった。

「当時のアベレージは150台でしたが、そのときはなぜか調子がよくて、一時的に200アベを超えるくらい打っていました。でも、終わってみれば次々点くらいで本大会には行けず、とても悔しかった記憶があります」(遼太)

その悔しさがボウリングへの向き合い方を変えた。「上手くなりたい」ではなく「負けたく



▲ジュニアクラブを指導する遼太選手。「今は両手投げが男子の主流で、ボールの回転数も平均的に高い。ジュニアクラブにも、右手投げの自分よりすごいボールを投げる両手投げの子が大勢います(苦笑)」

「当時のジュニアクラブは僕が全面的に指導していました。練習は週4回、1回2~3時間が基本。発足時は10人ちょっとで、小中学生がメインでした。ジュニア教室から『競技ボウリ

ない』という思いが急成長を促し、中3の終わりころには早くも200アベを突破する。

「僕の指導法は、いろいろな人のジュニア教室を見て自分なりにアレンジしたものです。型

にはめるのではなく、各人の個性をつぶさず伸ばしていくことを心がけていました。今の子はスマホで自分の投球を録画して分析もできるし、うまい人の動画を見て研究することもできる。自分の目で見たものを吸収していくのは本当に速いですよ(直之プロ)

## 教える側に立つて思うこと

その後、進学した高校にボウリング部はなかったが「たまたま、ジュニアクラブで一緒に投げていた子が同学年にいたこともあって、父が学校と交渉してボウリング活動に融通が利くように環境を整えてくれた」という。そのかいあって、2年時にU-18(全日本ユースナショナルチーム)のメンバーに選出され、3年時に中国・上海で開催されたAMFワールドカップに出場。当時の夢だった海外遠征を実現させた。

しかし成績は振るわず、大学1年時に受けたナショナルチームの選考会も不合格。それでも腐らずに練習を積み重ね、3年時の再挑戦で晴れてナショナルチームの一員に。4年時には第52回宮様チャリティーを制し、ジュニア時代の雪辱も果たした。

卒業後は、大学在籍時からアルバイト勤務していた笹塚ボウルの正スタッフとなり、父とともにジュニアボウラーの育成とその環境づくりに取り組んでいる。

「今、ジュニアクラブの指導は遼太が中心です。時代とともにボウリングのスタイルも変わってきて、最近は僕が彼に聞くことのほうが多いので。クラブの仕組や行政とのつながりを作ったりするときは、僕が出ていったほうが物事はスムーズに進むけど(笑)」と直之プロ。では、教える側に立った遼太選手はどんな心持ちで

いるのだろうか?

「ジュニアクラブの子たちとは距離を取らず、友達感覚で話せる存在でありたいと思っています。イメージ的には“同じところにいる目上の人”という感じ。上から目線でモノを言わず、何でも一緒にやるように

く、現状では難しいだろう。

モチベーションを保つために考えているのは、ナショナルチーム卒業を待たずしてのプロテスト挑戦だ。昨年、JBCの競技者規程が改定され、会員がプロライセンスを取得しても退会の必要がなくなり、



▲現在は親子で笹塚ボウルに勤務。「息子とはボウリング場で一緒にいる時間のほうが長いですね。逆に言うと、彼がボウリングを始めるまではほとんど家にいない親父でしたから、一般の家庭とはかなり違います」と直之プロ

しています。そのほうがお互いやりやすいし、『上手くなりたい』と思ったら、自然と質問の回数も増えてくる。先回りしてアドバイスすると“失敗する機会”を削ってしまって、逆に頑張れなくなる。だから基本的に、子どもたちには好きなように投げさせています。200アベを超えるか超えないかわからいまでは、投げる量のほうが大事だと思うので」

## プロとの“二刀流”を視野に

一方、現役選手としての活動は、長引くコロナ禍に邪魔されて停滞中だ。20年度で任期満了となったナショナルチームは、昨年3月に“一発勝負”で行われた選考会を総合4位の好成績で突破して2期目に入ったが、1月に予定されていた沖縄合宿は“オミクロン株”による感染急拡大で、数日前に中止が決定。7月には第26回アジア選手権大会が香港で開催予定だが、前後に隔離期間を要する海外派遣のハードルはさらに高

プロ・アマ両方の活動が可能に。すでにナショナルチームの先輩・安里秀策が“二刀流”の先駆者となったことは周知のとおりだ。

「今年のプロテストを受けるつもりで準備を始めています。ナショナルチームの他のメンバーも、たぶんかなりの人数が受けると思います」(遼太)

父もその決断に異論はない。

「合格は当然。今の実力でプロになれないわけがないと思いますが、大事なことはプロになったあとにどうすべきかということ。トーナメントで常に上位にくるためには強い気持ちが必要で、そのことは常々言い聞かせています。僕が早くトーナメントに出るのをやめた分も、遼太には頑張ってもらいたいと思う」(直之プロ)

父が41期のプロテストでトップ合格を果たしたのは24歳のとき。今の遼太選手よりキャリアが浅く、3度目の挑戦での大願成就だったが、果たして息子は!?